

肱川水系の魚類(1)

辻 幸 一^{*}

肱川は県下で最大の河川で、その流程約270km、集水面積約1200km²に達し、9町村と大洲市にまたがり伊予灘にそそいでいる。上流には鹿野川ダムと野村ダムがあり、さらに河辺川に新たなダムの建設が予定されている。この肱川水系には多数の淡水魚が生育しており、川魚を求めて川に親しむ遊漁者も多い。肱川水系の魚類相については、これまでに55種の魚類が確認されている(水野、1987)。

これら肱川水系の淡水魚および海からの回遊魚については、一部の有用魚種以外は、一般にあまり知られていない。また、近年の河川改修などによる環境の変化により、減少している魚種が多い。そこで、これらの淡水魚を少しでも形に残しておきたいと考え、数年前から肱川水系の淡水魚の採集と標本写真を撮り始めた。まだ、始めたばかりで、まとまった形にはなっていないが、現時点での確認種を表に示し、数枚の標本写真をここに掲載した。表の種名、学名などは川那部・水野(1989)に従った。

現在まで筆者自身が採集地した場所は、小田川下流、河辺川、矢落川、久米川上流および肱川本流の中流から河口域までである。現在、肱川水系から採集または目視観察によって確認できたのは30種である。そのうち、カワアナゴだけは目視観察だけで標本の確認はできなかった。

ヨシノボリは、今までは1種として特に区別されていなかったが、現在では9種に分類されている(川那部・水野、1989)。肱川で採集したヨシノボリもこれに従って分けると、シマヨシノボリ、オオヨシノボリおよびトウ

ヨシノボリの3種が確認できた。大洲地方ではこのヨシノボリの小型のものとカワヨシノボリを「カジカ」と呼び、食用にしている。チチブもヌマチチブとチチブに分けられているので、これに従うと、採集したものはヌマチチブであった。

多くの種が肱川での広い分布を示しているが、一部魚種については採集場所をここに記しておく。タカハヤとイシドジョウは河辺川で採集した。タイリクバラタナゴは矢落川の下流で雄の成魚を1尾採集した。大洲市八多喜の肱川下流域では、カワアナゴを目視観察し、ブルーギルを写真に撮影した。ギギは中流域の大洲市菅田で釣り上げられたものを手に入れた。アカザは五十崎町の小田川で採集した。ヌマチチブは中流域で多数確認した。ヒメハゼ、アシシロハゼおよびクサフグは河口域で採集した。

今後は確認魚種を増やして、全体の目録完成を目指したいと考えている。多くの人々からの情報やご指摘をいただきたい。

文 献

- ・川那部浩哉・水野信彦・監修、1989：山溪カラー名鑑 日本の淡水魚、山と溪谷社、東京。
- ・水野信彦、1987：肱川、第3回自然環境保全基礎調査、河川調査報告書、四国版、38の1-63、環境庁。

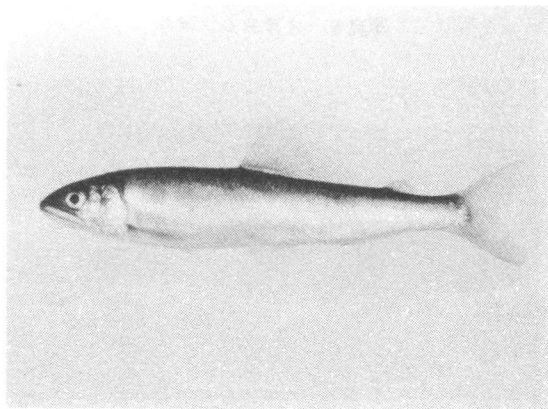


写真1 ア ユ

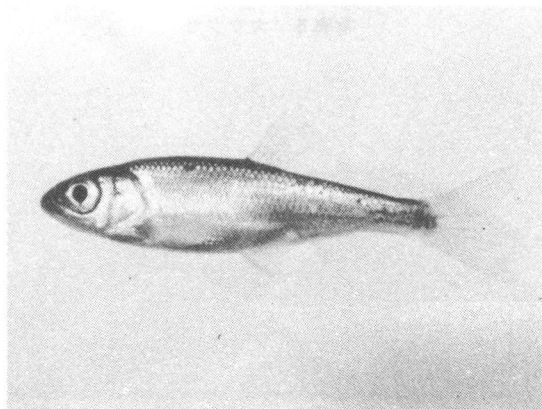


写真2 カワムツ

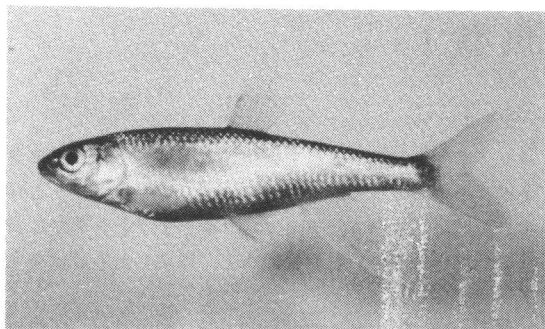


写真3 オイカワ

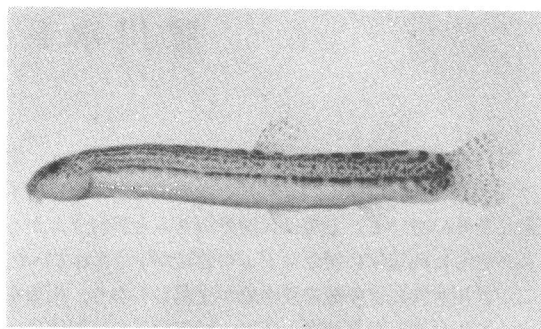


写真7 インドジョウ

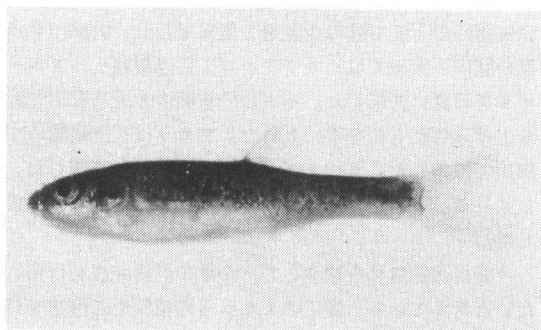


写真4 タカハヤ

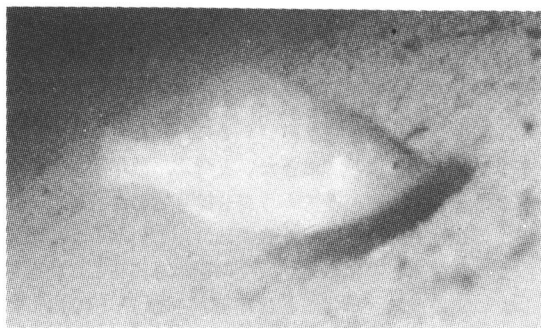


写真8 ブルーギル

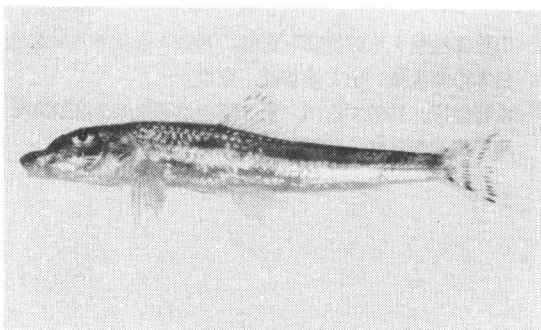


写真5 カマツカ

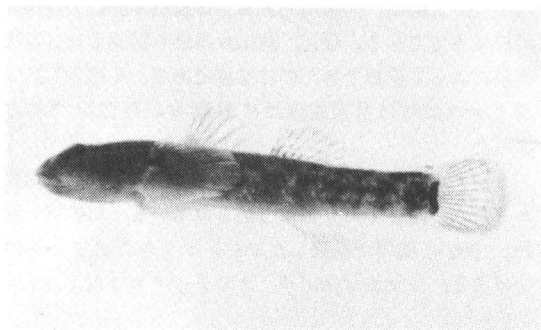


写真9 オオヨシノボリ

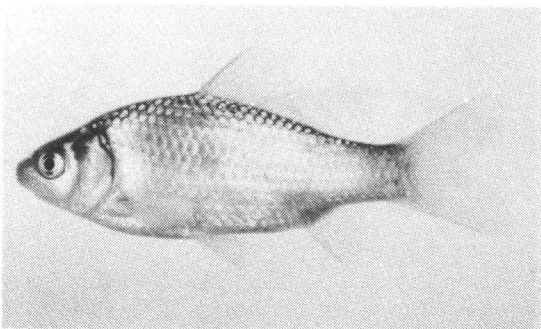


写真6 ギンブナ

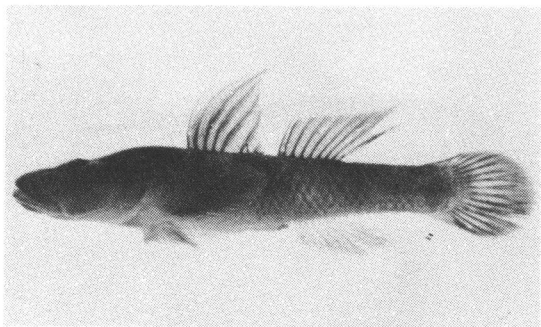


写真10 トウヨシノボリ

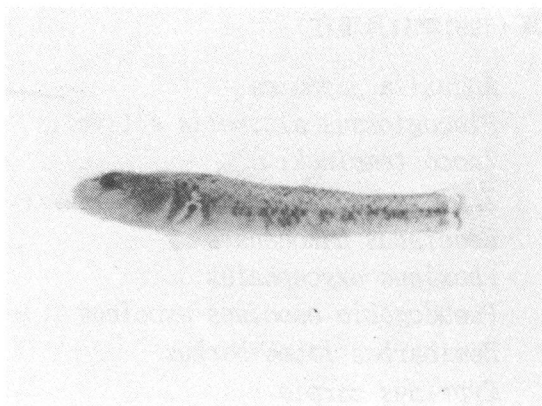


写真11 カワヨシノボリ

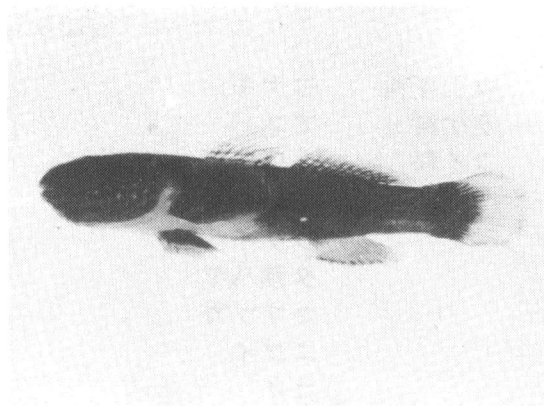


写真12 ヌマチチブ

写真1 アユ

初夏のアユの解禁から、夏の風物詩の大洲の鵜飼い、秋の落ちアユ漁まで、肱川を代表する魚である。肱川のアユも現在では放流が大部分を占めており、天然アユは少なくなっている。

写真2 カワムツ

肱川の在来種で一般にハヤと呼ばれている純淡水魚で、体側の中央に1本の黒色縦条がある。オイカワが増えたために本流域では数が減少している。産卵期には雄が赤い婚姻色になる。

写真3 オイカワ

本種の大部分はアユの放流に混じって肱川に入ってきたと考えられており、昭和8年頃から増えてきたということからか、地元では「ショウハチ」と呼んでいる。河川改修後の単調な川でも生育できるために、分布を広げている。産卵期には雄が赤い婚姻色になる。

写真4 タカハヤ

上流域に多く生息している。小型の地味な魚で、体の断面が他の魚に比べて丸い。

写真5 カマツカ

本種も移入魚と考えられており、中流域に多く見られる。口が下向きにつき、砂といっしょに餌を吸い込む。砂質底にじっとしていると見つけにくい。

写真6 ギンブナ

肱川本流の淵や水田の水路などに多く生息している。

写真7 イシドジョウ

上流域の砂質底に生息するが、分布が限られていて、

絶滅が心配されている。普通のシマドジョウとは尾びれの付け根が細くくびれないことで区別できる。中国3県・福岡・四国2県のように分布している。

写真8 ブルーギル

北米原産の帰化魚で、オオクチバスと共にその害が問題となっている。肱川ではまだ多くないが今後の増加が心配される。この写真の個体は幼魚で、尾びれが切れていた。

写真9 オオヨシノボリ

ヨシノボリ黒色大型と呼ばれていたもので、肱川の中流から上流域に多く生息している。胸びれの根元に黒色斑があるのが特徴である。

写真10 トウヨシノボリ

ヨシノボリ橙色型と呼ばれていたもので、在来種でなく移入種と考えられている。尾びれの付け根がオレンジ色になるのが特徴である。肱川の中流域に多い。

写真11 カワヨシノボリ

ヨシノボリ類とよく似た地味なハゼだが、大きい卵を産み、他のハゼのように海に下らず淡水域で一生を過ごす。肱川の中流から上流域に生息する。

写真12 ヌマチチブ

地元では「ドンコ」と呼ばれている黒いずんぐりしたハゼで、チチブとは胸びれ付け根のオレンジ色の線で区別される。中流域の淵の岩場で多く見かける。

肱川水系で確認した魚類 (1991年11月現在)

ウナギ科	ウナギ	<i>Anguilla japonica</i>
サケ科	アユ	<i>Plecoglossus altivelis altivelis</i>
コイ科	カワムツ	<i>Zacco temmincki</i>
	オイカワ	<i>Z. platypus</i>
	ウグイ	<i>Leuciscus hakonensis</i>
	タカハヤ	<i>Phoxinus oxycephalus</i>
	カマツカ	<i>Pseudogobio esocinus esocinus</i>
	ニゴイ	<i>Hemibarbus labeo barbus</i>
	コイ	<i>Cyprinus carpio</i>
	ギンブナ	<i>Carassius gibelio langsdorfi</i>
	タイリクバラタナゴ	<i>Rhodeus ocellatus ocellatus</i>
ドジョウ科	ドジョウ	<i>Misgurnus anguillicaudatus</i>
	シマドジョウ	<i>Cobitis biwae</i>
	イシドジョウ	<i>C. takatsuensis</i>
ギギ科	ギギ	<i>Pseudobagrus fulvidraco</i>
	アカザ	<i>Liobagrus reini</i>
ナマズ科	ナマズ	<i>Silurus asotus</i>
メダカ科	メダカ	<i>Oryzias latipes</i>
ボラ科	ボラ	<i>Mugil cephalus cephalus</i>
スズキ科	ブルーギル	<i>Lepomis macrochirus</i>
ハゼ科	カワアナゴ	<i>Eleotris oxycephala</i>
	ドンコ	<i>Odontobutis obscura obscura</i>
	ヒメハゼ	<i>Favonigobius gymnauchen</i>
	シマヨシノボリ	<i>Rhinogobius sp. CB</i>
	オオヨシノボリ	<i>R. sp. LD</i>
	トウヨシノボリ	<i>R. sp. OR</i>
	カワヨシノボリ	<i>R. flumineus</i>
	ヌマチチブ	<i>Tridentiger kuroiwaie brevispinis</i>
	アシシロハゼ	<i>Acanthogobius lactipes</i>
フグ科	クサフグ	<i>Takifugu niphobles</i>